



ミンガラバー

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL: 086-224-0102
FAX: 086-221-2554
URL: http://www.mjcp.or.jp

ミャンマー側窓口役岡山へ ミヨウキン、タンセイイン両氏

協会活動のミャンマー側窓口になっているミヨウキン元国立医学研究局長とタンセイイン国民健康財団理事長が10月、岡山を訪れて4日間滞在した。2人にとつて3年半ぶりの来日。

ミヨウキン氏は協会ヤンゴン代表で、協会と関りが深いミャンマー元日本留学生協会(MAJA)の会長だ。岡山大学国際同窓会の会長も務めており、10月21日に対面とZoomを併用して催された同窓会総会に出席し、挨拶をした。

かつてWHO(世界保健機関)の東南アジア局長を務めたタンセイインさんについては、今後、協会活動をどのように進めるか、意見を聞くために協会が招いた。

20日夕、協会主催で2人の歓迎会が岡山市中区の岡山プラザホテルであり、協会や岡山大学などの関係者のほか、同大学に留学中のミャンマ



■ 旭日小綬章を受ける
日本政府の秋の叙勲でミヨウキンさんが旭日小綬章を受けた。日本とミャンマー間の親善と相互理解に寄与が受賞理由。



④ 感染対策のため間隔を取つての歓迎会
岡山プラザホテル
⑤ 岡山大学長を表敬訪問。左から横野学長、ミヨウキンさん、タンセイインさん、岡田理事長、岡山大学津島キャンパス

田中奨学金、新たに2人へ

研究に専念できます

故田中茂人理事の寄付をもとにした「田中医療奨学金」の新たな受給者に岡山大学大学院の私費留学生2人が決まった。ヤミンソウさん(27)とモチイハさん(26)。研究に専念できる、と喜んでいる。



ヤミンソウさん

口腔がんの病態解明へ

ミャンマーに多い口腔がんについて、ヤンゴン歯科大学に在学中から関心を持っていた。卒業後2年間の歯科医院勤務を経て、21年

10月に岡山大学大学院博士課程(口腔病理学)に入學したが、コロナ感染拡大で来日できず、今年5月にやっと来日した。

口腔がんの中で最も多い扁平上皮がんの進展メカニズムに着目して研究。指導に当たる長塚仁教授によると、非常に研究熱心で、すでにがんの進展抑制につながる興味深い研究成果を見出していると、という。



モチイハさん

タイへ出国 夢かなえる

ヤンゴン第一医科大学に在学していた17年、ミャンマーとの学生交流で1カ月、岡山大学医学部の授業に参加した。「いつかまた、岡山にやってくるまで本格的に勉強したい」。この時に抱いた夢だった。

寄付クリニック

薬品不足がち

MAJA新会館

建築許可ずみ

ミャンマーからの情報が途絶えがちの中、寄付クリニックはどうなっているか。

田中ホールができる元日本留学生協会(MAJA)の新会館建設は進んでいるのか。来日した2人に聞いた。

これまで協会員らが寄付したクリニックは17カ所。タンセイインさんによると、地域保健所として、あるいは地域の中心的な産院として、それぞれ活動している。しかし、薬品は不足がちで、手術器具も更新できない状況。改修計画がありながらすすんでいないところもある、という。

初の留学生 東亜大へ

医療機器人材プロジェクト

るもある、という。ミャンマーと日本間の文化、学術の新しい拠点になるMAJA新会館は4階建てで、3階に、故田中茂人理事からの寄付の一部をあてた「田中記念ホール」が計画されている。ミヨウキンさんは「諸般の事情で建設は遅れているが、許可はすでにおりている」と説明した。

ミャンマーの医療機器管理人材(メディカルエンジニア)を育成するプロジェクトで、日本への初の留学生ピョーピューティンさんが9月に来日した。修士号取得をめざし、山口県下関市の東亜大学で勉強している。ヤンゴン医療技術大学に開設されたME育成1年制コースの1期生。19年に卒業後、即戦力として病院で働いていた。

プロジェクトはJICA(国際協力機構)が事業費を負担、日本臨床工学技士

編集後記

コロナ禍にミャンマー政変が重なって、協会の活動は思うに任せぬ日々が続きました。ミンガラバーもネタ不足で、いっそのこと、しばらく休刊しようかと思ったほどです。それが、活動に動きが見え始めました▼協会にとってカウンターパートというべきミヨウキンさんとタンセイインさんが揃って3年半ぶりに来日。困難を乗り越えて岡山大学で研究をスタートさせた私費留学生2人に田中医療奨学金の支給。寄稿して頂いた病理診断学の柳井広之教授は「またいつかミャンマーを訪れ、診断のお話をするのを願っている」と結び、スポーツを指導して帰国したばかりの井上満さんは「今後も支援していきたい」と締めくくっています。今号の紙面づくりを終え、気分が少し明るくなりました。(西崎)

岡山大学病院病理診断科

柳井 広之 教授

いつの日か訪れ お話を



ミャンマーからの留学生を指導の合間に。右端が柳井教授＝岡山大学病院

「昔、ビルマって呼んでたよな」。それくらいの認識しかなかった私がなぜ、ミャンマーと深く関わるようになったのか。それは2006年に協会の岡田茂理事長から声がかかって突然、ミャンマーの医師に子宮頸癌のスクリーニングの方法として細胞診を教えることになり、急速に身近な国になりました。

指導したのは、この年に設立された協会が招いた研修生の第1号であるムムシユエ医師、モウモウアウン医師でした。海外の先生を受け入れるのは初めてで不安がありましたが、当時在籍していた大森昌子先生（現在、倉敷成人病センター病理診断科主任部長）や当科の細胞検査士の皆さんの協力を得て3カ月の研修を終えました。

15年にはビクトリア病院のミンミン・ミントウ医師とニタカイン医師が、16年にはナンチョウウヌエモン医師、キンラピートウン医師が2ヶ月の研修のために訪れました。この頃には当科の若い医師もミャンマーからの研修医

と一緒で診断の勉強をしており、このような機会ができたのはお互いによい経験になったと思います。

17年1月にはヤンゴンの医学研究大会で講演する機会があり、初めてミャンマーへ出かけました。なんと行って嬉しかったのはそれまで当科で研修した皆さんと再会できたことです。

講演後に訪ねた公的病院のヤンゴン中央婦人科病院では、日本ではもう時代遅れになった機械が使われていたが、民間病院のビクトリア病院では最新鋭の機器が揃っており、官民の格差を感じました。

その後も2名の医師が当科で研修。ミャンマーとの縁が続くうちに再び渡航する機会をうかがっていました。新型コロナウイルス感染症の流行のため、それも叶わなくなりました。しかしコロナ禍の中、ミンミン・ミントウ医師らがミャンマーの病理医の教育のためにズームによる講義を企画していた、その講師として声がかかりました。20年には2回の講義を行い、聴講者はいずれも100名を超えました。

このような新しいやり方で貢献できることに喜びを感じて、次の講義を21年2月初めに準備していた、まさに直前の2月1日にクーデターのニュース。先方とも相談してとりあえず講義は延期となり、今も再開の目途は立っていません。

現在、病理学の大学院生として研究をしているミャンマーからの留学生と毎週、一緒に標本を見ながら診断の指導をしています。政治はもちろん重要なのですが、私にできることはとにかく良い病理診断ができるミャンマーの病理医を育てるお手伝いをするだけのことしかありません。またいつか、色々な状況が落ち着いたときにはミャンマーを訪れ、現地と一緒に標本を見ながら診断のお話することを願っています。

まず、なぜ私がミャンマーでスポーツの指導をするようになったのかをお話します。

学生時代から体を動かす事が好きで、中学生のころに始めたバレーボールが縁で様々な方のお世話になり、社会人ではクラブチームでプレーしていました。サラリーマンという仕事に悩んでいた時、バレーボールの恩師の助言からJICA(国際協力機構)青年海外協力隊員としてケニアに行き、バレーボールを指導。それがきっかけで国際協力、国際交流に関心や興味がわきました。日本に帰国後、スポーツクラブで体操や水泳のコーチをしたり、学校の部活動指導などを行ったりするうち、再度、海外に挑戦しようと考えました。

この2年間の活動を通して私は「こんなに素敵な国があるんだ」と心底思いました。国として経済、医療、教育など、まだまだ発展途上ですが、そういうもの全てを超えるほどの人々の優しさに魅了されたのです。

私はミャンマー人の国民性を聞かれるといつも「きつと昭和初期、戦前戦後の日本人もこんな感じだったのではないかな、というように優しい人ばかりです」と答えます。

そして今回、21年10月から今年10月まで、再びスポーツの指導をしてきました。前回はヤンゴンで育成

岡山スポーツ国際交流会 井上満・代表世話人



指導した選手と一緒に。中央が井上さん＝ネピドーの体育館

という職種でした。自分の経歴と照らし合わせて応募、2018年2月から20年2月まで、最大都市ヤンゴンにあるスポーツ研究所という名前のアスリートを育成する学校で、主に基礎運動能力の向上に関わりました。

この2年間の活動を通して私は「こんなに素敵な国があるんだ」と心底思いました。国として経済、医療、教育など、まだまだ発展途上ですが、そういうもの全てを超えるほどの人々の優しさに魅了されたのです。

私はミャンマー人の国民性を聞かれるといつも「きつと昭和初期、戦前戦後の日本人もこんな感じだったのではないかな、というように優しい人ばかりです」と答えます。

そして今回、21年10月から今年10月まで、再びスポーツの指導をしてきました。前回はヤンゴンで育成

ヤンゴンとネピドーでスポーツ指導

世代が対象でしたが、今回は首都のネピドーでシニア・ナショナルチーム選手へ指導をしました。その内容は空手、柔道からサッカー、バレーボールなど様々な種目の選手に対し、それぞれ特性にあったトレーニングの提供と正しい姿勢や自分で何にフォーカスして練習しているのかを考えてもらうコーチングでした。

ミャンマーのトレーニングはウエイトトレーニングによる筋肉肥大が主であり、種目に合わせたスピードや柔軟性を重視した方法はあまり行われず、もともと地味な基礎的なトレーニングが多いです。そのため、きちんと理解してもらうことにとっても苦労しました。

頑張る選手たち

今回は複雑な政情の中の渡航でしたが、以前ヤンゴンで指導していた時の生徒と再会できたり、知っているコーチと出会えたりしました。彼らから笑顔で「サヤーワンターデーピョデー（先生に会えて嬉しいです）」と話しかけられると、私もとても嬉しかったです。

皆さんはSEAGAMESというスポーツ大会をご存じでしょうか。Southeast Asian Gamesの略称で、東南アジア競技大会と呼ばれます。基本的には2年に1回の開催で22年はベトナムハノイで開催されました。その時に上位入賞したミャンマー選手の多くは私が指導していた選手たちでした。今、スポーツ選手に対しても様々な意見があり困難な状況ですが、選手たちは変わらずに頑張る指導をしてきて本当によかったと感じています。

一方で、生活する上では以前と違うところが多いのがあります。例えば、以前と比較して、セキュリティチェックが多くなり、銀行でドルが引き出せなくなることもありました。ガソリンは20年帰国時の3倍ほど上昇、輸入品のスナック類も軒並み2倍以上値上がりしていました。

そんな中、ヤンゴンとネピドーは少しずつ平穏を取り戻しつつあるのかな、と感じました。ショッピングモールも多くの人出がありました。SNSや聞いた話では、農村部は貧しい人が増えているそうです。

ミャンマーは本当に複雑で難しい状況ですが、私は3年間の生活経験で、ミャンマー人の優しさ、真面目な性格に変わりはないことを確認。今後も継続的にこの国のスポーツ向上のためにできることを支援していきたいと思っています。

優しさに魅了された

その時にJICAシニアボランティアの要請が出ていたのがミャンマーの体育